広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	外国滞在家庭の子どもの母国語補習 : 日本語とドイツ語の中で
Author(s)	小畑, 佳子
Citation	児童の言語生態研究 , 9 : 54 - 58
Issue Date	1978-06-08
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045106
Right	
Relation	

特別寄稿

外国滞在家庭の子どもの母国語補習

――日本語とドイツ語の中で――

聖心の布教姉妹会 デュッセルドルフ修道院 小畑佳子

わたしは ゼアグートよ

「筆をつかってかくのがおもしろいから、それを書く。」

「わたしもマーレンすきよ。」

「ぼくは国語の時間のことを書こうかな。」

笑顔で、思い思いのことを話す九名の二年生。

教材「学校でのできごと」（光村・二・上）での作文の授業風景である。（教科書は、各学年とも光村図書を使用）

作文はまず書こうという気持ちを起こさせなければならない。初めに教科書を読ませても、こちらではとくに参考にならない。この単元の「ともだちの作文」の例にも「千四百人の食き」という給食の調理員の苦労を書いたものをあげてある。日本の小学生にとって給食はきわめて興味深いことであろうが、ドイツでは、学校は午前中に終わってしまう。

（別紙時間割参照）

一週間前、子どもたちに通学しているドイツの学校の時間割を書いて持ってこさせた。九人の通っている学校は、みな違う。学校はいずれも自宅からきわめて近距離にある。時間割は、始業・終業の時刻から、教科の時間数もまちまちで、それぞれ個性のあるものであった。ほぼ共通しているのは、始業から二時間分を算数か国語（ドイツ語）に当てることで、どちらをするかはその日にならないと子どもたちにはわからない。それだけ担任教師の独自性が重んじられており、遠足や小旅行も学級単位で行われる。日本のように、全校一斉に遠足をすることはない。

その時間割を見ながら、一人一人話をしながら、くわしく書いてみたいことを決めていった。絵をかいたことを書きたいといった子に、「絵のぐで、なんの絵をかいたの。」と聞くと、「花のえに色をぬったの。」という。花をえがくことからしたのか、先生が輪郭をかかれたものに色をぬっていくのか、とたずねるうち、「じゃあ、書いてみる。」といった。

次の子は、すでに体育の時間のことを書くと決めていた。今、どんなことをしているか聞くと、「水えい。」という。学校にプールはなく近くの市営プールへ出かける。

「先生もプールへ入られるのでしょう？」

「入らないよ。」

「でも泳げない人もいるでしょう？」

「いるよ。でも、先生はプールの上から、こうやってやんなさいと手を動かしてみせている。」と、手の動作をくりかえしてみせる。

「あなたは、うまく泳げるのね。」体のきゃしゃな女の子は、うれしそうに「うん。」

「先生にほめられるでしょう、ね。」

「うん、そう。」ますますうれしそうに答える。

「先生は、なんてほめられるの、グート？」

「わたしは、ゼアグート（とてもよい）よ。」

「すごい、すごい。じゃあ、それを書いてね。」

もう、えんぴつが動き出している。

一応書き上がったところで、さらに一人一人に「その時、ぼくは」「すると、先生は」とノートに書き入れてやり、細かく書き加えさせた。自分の動きも入って、ある時間のことが出来上った。

国語（ドイツ語）・算数・理科・体育・図工・朝登校して始業まで・遊び時間・放課後とさまざま。

「いろいろ書いてくれたので、どんなことをしているかよくわかりました。でも、どんな気持ちでしているのかな…」言いかけると「たのしいよ。」「きつくないもん。」「先生はやさしいよ。」「はやくべんきょうはおわるし。」日本の学校と比べると、いいことづくめのようだ。当地にも日本人学校があり、同年の子と接することもあるのだろう。その折、気づいたことであろうか。親ごさんたちの話に出てくることもあろう。さらに「宿題はないしでしょう？」と加えると、「しゅくだいは、あるよ。」「あるある。」「そりゃあ、あるさ。」あるのがあたり前とでもいうように強くいう。一時間以内でできる程度の宿題が出るようだ。

一人一人のを見ながら、ここにその時の気持ちを書いてとか、おしまいに考えたことを書いてとか指示しながら、ともかくノート三～五ページほどの作文ができ上った。

中には算数の計算問題や、花の絵や、図工に使った道具などを絵に表わしたのも入っている。

次の作文は、三才の時大阪より来独した女の子の書いたものの一部である。

わたしは、理科のべんきょうが大すきです。きょうは花のべんきょうをやりました。

わたしの先生が花をもってきました。この花はこれです。大きくなれるのです。ノートにひまわりをかきました。そして、見たこおり（とおり）かきましたが、むしがありました。たい（あたい＝わたし）がこわがた（こわがった）です。にな（ニナ）がわらいました。先生は、おそとにはかし（ほかし）ました。

現在、この国語教室の在学生のうち、日本の小学校生活経験者は、三年に二人いるだけで、一、二、四年にはいない。次に、日記の中から生活の一端をのぞいてみたい。

九月十九日　月曜日

学校の休み時間にまた男の子たちは、わたしたちにいじわるをしました。教室のそばにさいている小さい赤いものをわたしたちになげます。一回、わたしの目にあたりそうになったのでおこりたくなりました。しかし、わたしたちもまけないで向っていって、一度わたしは一人の男の子の足をひっかけてころばしました。

わたしはむねがすっとしました。

（三・女子・ドイツで誕生）

八月二十五日

わたしたちはいっぱい先生からならいました。社会・国語・英語・数学を勉強しました。担任の先生はフラウ（婦人に対する呼称）ボックで、年とった先生です。クラスは、全部女子で、二十六名です。

（この日からギムナジウムへ進学、四・女子・生後まもなく来独）

八月二十三日

いよいよ今日から、きびしい学校がはじまりました。国語と算数があって、本からおもしろい詩を読みました。この詩はとてもいいにくくて、なかなかむずかしいです。でも、家に帰ったわたしは、れんしゅうをして、まあまあできるようになりました。

（三・女子・滞独年数五年）

いずれも、ドイツでの生活を素直に書いている。

ここ国語教室でも、できるだけ日本の学校でのようにと心がけている。進級は四月で、三月で年度が終わる。（ドイツでは九月に始業、七月終業で、七、八月長期の夏休みとなる。）現在、一年・十名、二年・九名、三年・六名、四年・五名の計三十名の通学児童がいる。時間は、四十五分授業の週四時間。

木	水	火	
一年	二年	一年	14:00〜15:30
三年	四年	三年	15:30〜17:00

金曜日　二年・四年

一時間半の授業の途中、五分から十分の休憩をとる。子どもたちには楽しい貴重なひとときだ。一年の間には、入学式、クリスマス会、文集作り等、他学年と交わる機会も設けている。二学年ずつ二人で担当している。

午前中、ドイツの学校での授業を受け、昼食後かけつける国語教室。疲れてもいよう、別のこと（ドイツの学校でのことなど）で頭がいっぱいなのでは……と心配しつつ教室へ向かう。ビルの三階の教室前の廊下で、おにごっこやかくれんぼに興じている明るい声が、そんな心配をふきとばしてくれる。

みんな起立して、「こんにちは」。元気のよいあいさつで授業は始まる。

補習校の生いたち

一九六三年、当時の駐在大使からデュッ

一年生

	月	火	水	木	金	土
1. 8:15~ 9:00	ことばの練習	宗教	ミサ	国語	ことばの練習	
2. 9:00~ 9:45	算数	算数	ことばの練習	算数	国語	
3. 10:15~11:00	体育	国語	算数	ことばの練習	音楽	
4. 11:00~11:45	体育	(算数の補習)	図工	(ことばの補習)	(国語の補習)	

一年生

	月	火	水	木	金	土
1. 8:15~ 9:00	×	宗教	×	体育	×	
2. 9:00~ 9:45	×	×	×	×	×	
3. 10:15~11:00	×	×	×	×	×	
4. 11:00~12:45		図工		宗教		
5. 12:45~13:30				(補習)		

×印（国語　ことばの練習　算数）

二年生

	月	火	水	木	金	土
1. 8:15~ 9:00	国語	算数	ミサ	体育	算数	
2. 9:00~ 9:45	算数	国語	算数	国語	国語	
3. 10:15~11:00	理科社会	理科社会	国語	算数	理科社会	
4. 11:00~11:45	(補習)	宗教	図工	音楽	図工	
5. 11:55~12:40		体育	(補習)			

（補習）はその必要な子どもだけ

二年生

	月	火	水	木	金	土
1. 8:00~ 8:45		国語	ミサ	体育	国語	理科社会
2. 8:50~ 9:35		算数	国語	体育	算数	国語
3. 10:00~10:45	国語	理科社会	算数	国語	理科社会	
4. 10:50~11:35	算数	図工	理科社会	算数	宗教	
5. 11:45~12:30	理科社会			音楽		
6. 12:30~13:20	図工					

（土曜日の授業は学校によって有ったり無かったりです）

セルドルフにいる日本人の子どもたちに、国語の補習をしてほしいとの依頼があり、四十五㎞離れたケルンから通っていた。

デュッセルドルフの中央にあるライブニッツギュムナージウム（中・高等学校）の一隅を借りて、午後のひとときを子どもたちと共に国語の勉強をした。みんな現地校に通っている子どもたちで、日本の子どもたちが集うのは、この機会しかなく、楽しみに来ていた。休み時間は喜々として遊んでおり、お互はドイツ語で語りあい、けんかは必ずドイツ語であった。

経済の高度成長にともない、子どもの数は増し続け、就学前の子どものクラスも設けられた。数年度には、国語のほかに算数の補習も加わった。

一九七一年に日本人学校が設立され、カトリック教会のセンターを借りて、まず小学五年生から中学三年生四十名が現地校から集団で一斉転入した。翌年には小学一年生から四年生までの百六十名が、この仮校舎に移ってきて、学校の形態が整った。

仮校舎時代は、教える側も教えられる側もお互に必死の努力をし、半年から一年後には本来の学習到達目標に追いつくことができた。しかも、さしたる言語上の障害はなかったと、当時の先生方から聞いている。

一九七三年には新校舎も落成し、ヨーロッパでは最初で最大の日本国際学校が創立された。

それと時を同じくして私共の修道院がデュッセルドルフに出来上り、その一角に国語教室と、みその園（幼稚園）が開園した。日本人学校へ行かず、ドイツの学校へ通う子どもたちのうち、前記の人数の子どもたちが、ここで補習を受けている。

クライン・トーキョー

デュッセルドルフは、西ドイツ（ドイツ連邦共和国）の首都ボンの北、約七十㎞、ライン川畔に位置し十一州の一、ノルトライン・ヴェストファーレン州の首都。

一九七五年の統計で、人口約六十七万五千。幾多の歴史を秘めて流れるライン川は、ここあたりで幅二百メートルないし三百メートルとなり、この両岸に都市はひらけている。近くにルール工業地帯をひかえて、活気ある商業都市の面目をもっている。

この地に、約三千人の日本人が在住し、約二百社にのぼる日本企業が事務所をもっており、一年後に市の中心に日本センターが設立されるほどの、西ドイツ国内でも一ばんの日本人の町といえよう。日本の商店はもとより、日本名（日本料理）のレストラン、日本クラブ、それに五百余名の在学生をもつ日本人子弟の通う日本人学校（正しくは日本国際学校）がある。

三千余名の日本人が年に一度集まる機会、運動会があり、終日、いかにも日本人的なにぎやかさの中でおくる。日本の本を見ようと思えば、日本クラブの図書館に行く。また日本の書籍を売る本屋も一軒ある。

こうしてみてくると、日本にいるのと変わらない生活ができるではないかと思われてくる。

先頃、ドイツ放送テレビは、「クライン・トーキョー」すなわち、ここデッセルドルフは、「小東京」だと、各方面からとらえ、いいきった。

わたしは　外国人？

教科書の六十八ページを開いてと言うと、「なに？」

「どぉこぉ？」と、すぐにはわからない。

「アハトウントゼヒツィヒ！」だれかがすぐ口に出す。（ドイツでの数字の読み方は、一の位を先に言って、「そして」をつけて十の位を言うので、九月二十一日を九月十二日と読んだりする。）

本教室では、できるだけ授業中ドイツ語を使わないようにとしているが、やはりドイツ語がとび出すし、その方がわかりやすいらしい。では、ふだんはどうなのであろうか。

家庭では、親子は「日本語で話す」（全員）が、兄弟となると「ドイツ語で」（二十五％）、あとは「ドイツ語がまじる」といい、「兄弟げんかはドイツ語」となる。ドイツの学校へ通っている日本人の友達とは「ドイツ語も使う」という。当然のことながら、滞独年数が長くなるにつれて、多くのドイツ人と交わりことばの抵抗は感じていないようだ。

三才で渡独、すぐ幼稚園に入り、やがてドイツの小学校に入学した現在三年生の女の子。入学式の日に「このクラスに一人外国人がいる」との担任の先生のことばを聞いて帰り、母親に尋ねたという。「ねえ、お母さん、わたしのクラスの外国人って誰だろう。」

授業中、何かを質問すると子どもたちは、目を輝かせながら手を上げる。が上っていた手は次第に少なくなっていく。何かためらっている感じで、「どうしたの？」と聞くと、「ぼく、わかるんだけど何んと言っていいかわからない」と言う。きっと質問されて、その瞬間わかったようで手を上げるが、自分のことばで発表する段階になると、どう表現してよいかわからなくなるらしい。友だちの答えを聞いて、「それだ」「そういいたかったの」と言っている。目の輝きからみて、子どもたちは直観的にはわかったと思われるが、母国語で表現する機会が少ないので表現に苦しむというのではないかと思う。

同じように、長い休みのあと（とくに林間学校へ、三、四週間行った後など）の話に、すぐ母国語が出てこない。

また、読書をしても、感想文はドイツ語でなら、うまく書けるのだがといいながら、夏休みには、次のように書いている。

ちびっこカムのぼうけん

あらすじ＝北の方の寒い国にカムという男の子と病気のおかあさんが住んでいました。おかあさんの病気をなおすために、いのちの草をさがしに行くカムとその友だちのぼうけんです。

ふしぎなこと＝黒い湖の水をのんだら、どうしてまほうにかかっちゃうのかしらない。

自分の思ったこと＝わたしはカムは勇気が

あり、えらいと思います。（四・女子10）

しかし、やがて帰国し、日本での生活を考えると、日本人の友達との交わりも大切にしてやりたい。そういった母親の心づかいは、

○ドイツ人の生活のサイクルに合わせるようにしている。（滞独5年の母親）

○ことばに慣れるよう、ドイツ人、日本人にドイツ語の家庭教師をお願いした。（3年）

○できるだけ、同年あるいは、やや年上の日本人の子と遊ぶように家に呼んでいる。（3年）

○家族ぐるみで、おつきあいするように努めている。（4年）

などのことばにも表れている。

道草くうのは　赤ずきんちゃんだよ

授業中、子どもたちとのやりとりの中で、思わず、つまずいてしまうことがある。

春がきました。あたたかになったので、天じょううらのねずみが、赤ちゃんねずみをうみました。（光村二・上「春の子もり歌」）

これは、日本でなら、何の抵抗もなく読まれる文であろう。

T「お母さんねずみは、どこで赤ちゃんねずみを生んだのでしょう。」

「天じょ　うらです。」

「天じょううらというところで。」

「天じょう　うらだよね。」

人の住む家の中にねずみが巣くうとは、思ってもみない子どもたちに、黒板に絵をかき、木造の家について説明する。すると

「ダッハ（屋根）だろう。」

「屋根は、雨の時、ぬれるからだめよ。」

「屋根裏部屋のことだ。」という。天井についてさらに説明して、聞いてみた。

T「うらは、わかるでしょう。」

「うん。足のうらっていうの知ってる。」

ドイツでは、全てレンガ、コンクリート造りの建物だから、天井というものはない。住宅は、四、五階から八階、十階建てがふつうで、子どもたちは、室内でも靴をはき、椅子に座る習慣しかない。さらに、光村三・上「太郎こおろぎ」（今西祐行作）でも、太郎の動きは、とうてい追えない。

二人のつくえの下には、ひみつがありました。つくえの下のゆか板に、ふしあなをけずったあながありました。もちろん太郎がけずったものです。

どこからもぐりこんだのか、太郎は教室のゆか下に入っていきました。

子どもたちは不思議がる。

「ゆか板をけずったって下は石でしょう？」

「どうして、ゆか下にはいれるの？」

折りにふれ、絵、紙しばい、幻燈など、できれば実物で、できるだけ指導するが、視覚に訴えることはできても、知ることにとどまっているのではないかと思う。従って、「道草をくう」のは、自分の体験することではなくて、本の話で知った「赤ずきん」の行動としてとらえることになる。（二・男子　8）、同じように「うば車」は、「馬車」の意（ドイツでは、キンダーバーゲン（子どもの車）、「食いしん坊」は「おいしい人」のこと、「黒山の人だかり」は「黒人たち」のことと、思いこんでいた例もある。

日本ほどではないが、それに近い体験ができるというものは、子どもたちそれぞれのわずかな体験をフルに生かして、理解を助けさせることもできる。

たとえば、四季の移り変わりと、それに伴う生活の様、気持ちなど。春・夏・秋・冬をドイツ語で示すことによって、自分の体験と結びつけさせることができる。しかし、生活の中で日本で（春分、夏休み、秋の運動会など）のように聞きなれていないし、一年の約半分が冬で、春とも夏とも区別がつかないドイツの季節では、日本のように、季節感がはっきりしておらず、季節や天候に関することばも細分化していない。われわれ日本人が交わす天候のあいさつをドイツ人は無意味だという。「むしむしする」感じは、乾燥した風土では味わえない。「多くの虫」の意ととる子どもがいるのもしかたがないと思われる。年中くもった空を「わるい天気」（一・女子　3）「きれいじゃない」（三・女子　6）といい、時おり快晴となると「すごくいい天気」（四女子　9）「太陽がいっぱい出ている」（四・男子　5）と表現する。

また、学習の中で、自分たちの体験とびったりするものの時、子どもたちは生き生きとしてくる。

春になると、たんぽぽの黄色いきれいな花がさきます。：よく晴れた日には、わた毛のらっかさんは、いっぱいにひろがってとんでいきます。（光村二・上「たんぽぽのちえ」）

春にいっせいに咲くたんぽぽは、その葉の形が似ているところから、「ライオンの歯」と呼ばれ、身近かにその変化を見ることができる。自然を美しく保つため国をあげて努力がはらわれており、街中の公園に郊外に、さまざまな花が咲き、きじや野うさぎの姿も見ることができる。

わたしは、お父さんとお兄ちゃんと、夕がたおさんぽをしました。公園の木のところに子うさぎとおとなのうさぎがいました。毛はうす茶色でした。（二・女子日記より）

また、ドイツ語に置きかえることで難なく理解される語も多い。むしろ子どもたちは、話しことばはもちろん、日記の中などにも、日本語でのめんどうな言い方、まして漢字で表わしたりはしないで、かたかなでその名称を記している。ただ、区別がつかないときもある。結局、ドイツ語での方が正確に早くありのままを伝えるのであろう。

アウトーバーン（高速道路）を三時間走って：：（四・男子　5）

クエルシュトラーセ（交差点）で：（三・女子）

キルメス（移動遊園地のこと）に行きました。いろいろなのりものにのりました。

カンランシャ（観覧車の意）とおもちゃの

ロケットとほんとうのうまにのりました。（二・女子　日記より）

逆にドイツ語を日本語に置きかえる時、適切さを欠く場合も出てくる。ドイツ語的用法の日本語とでもいえようか。

○ベットの中をもぐった。（二・女子8）
○ぼくはあしたもアイススケートを行きたい。（四・男子）
○わたしはソリーとすべった。（二・女子8）
○バスケットの試合がありました。私たちはあそべませんでしたが、見ているだけでおもしろいでした。（三・女子日記より）
○（劇で）ぼくは、たぬきでした。よくいくかなと考えてあそびました。（三・男子8）
ほかにも、
○弟はわたしより少くころびました。（二・女子　4）
○またの夜、わたしは買ものに行きました。（二・女子　8）
○いたかったから、ぼくはほえました。（二・男子　8）
○ぼくは、いっぱいこけた。（四・男子5）
○足にきずをもっていたので、泳げなかった。（四・男子　5）
○その時、雨がきていた。だからぼくは早く家に行った。（四・男子　5）
○どうろは　雨だらけだ。（一・男子6）

などと表わし、

さらに、山の連なるさまを「山々しい」と表現したりする。（四・男子　5）

母国語の意識を

最後に、現在私どもの心がけていることと、今後考えていきたいことについて述べてみたい。

一、よい教材を選んで―

必ずしも教科書通りではなく、本教室独自の進め方をしている。例えば一年の文字指導は、初めにかたかな、次にやさしい漢字をまじえ、ひらがなへ入るやり方をしてみたが、効果はあるようだ。

子どもの行動の世界は、ドイツ語の世界であり、生活を通して母国語に接する機会が少ないと思われるので、できるだけ、日本的な環境の中にひたらせ、母国語の必要性を動機づけるよう、学習に際してその深まりと広まりのあるものを選ぶ。

歌、絵、折り紙なども入れて、

年に一回クリスマス会（学習発表会をかねたもの）での演劇（全員出演）

二、継続学習を―

他教科をドイツ語でやるので、国語教室以外では、繰返しの機会がない。なんとか継続して学習できるよう、日記、読書ノートの記入を。またかんたんな宿題も必ず課している。

三、読書好きな子に―

一人一人の興味や能力を考え、助言する。感想発表させ、意欲的に取りくむよう他の子どもにも奨励する。秋の読書会、必読図書の設定、母親との共同読書のすすめ、図書館（現在蔵書数二千三百冊、うち児童生徒用千八百冊）の充実など。

ヨーロッパの一国に住んでいる子どもたちの豊富な体験は、童話や物語りを読むとき、鮮かな像をえがきつつ、心の中に広がっていくことであろう。ドイツから南に下れば、万年雪をいただくアルプス、牧草地のどこまでも広がる美しいスイス、さらに太陽の輝くイタリア、北にデンマーク、西方はベネルクス三国、そしてフランス。子どもたちは、どこへでもたいてい訪れているようだ。また、ドイツで生まれたたくさんの童話は、今なお人々には身近かなものであり、人々の心に生き続けている。

思いつくままに述べてみたが、大人が考えるように「日本とドイツとの違い」といわれても、日本での生活経験のない子どもたち、あるいは、あっても記憶にない子どもたちには、わかりはしない。比較などできるはずがない。したがって、子どもたちは、ドイツで、存在する全てのものを生活の中で感じとり、親の話や、国語教室での学習や、読書などの中で、わずかに修正・認識のし直しをしていくにすぎないのではないかと思う。あるものは変形し、あるものはおきかえねばならぬようだ。また、最初の記憶が鮮かであればあるほど、修正はむずかしいようだ。ともあれ、子どもたちが、内面的にどうとらえているか、消化しているか、今後も学習を進める中で、見守ってゆきたいと思っている。

この教室で学習し、転校していった子どもたちは、

○日本人学校はおもしろいです。：（二・男子　8）
○国語をはじめ他の事も何のトラブルもなく、学校になじめたようです。：（その母親）
○はじめは日本語で手紙をかくのはむずかしいでしたが、今はドイツ語で書く方がむずかしくなりました。：（三・女子　帰国後二カ月たって）
○おべんきょうはたのしいです。かん字がまだ少しだめでした。でもだいたい日本の学校にもなれてきました。：（一・女子　帰国後一月半たって）
○日本はとってもいそがしいです。（同じ子・帰国後半年め）
○日本はべんきょうがむずかしいです。（一・女子　二カ月たって）

と、子どもなりに手紙に感想を書いている。

休憩を入れて四十五分の二時間授業が終わる。「きょうは、ここまで。またこの次がんばりましょう。」それまでの真剣な顔つきがふーっとゆるんで「もう？」「早いなあ」「まだ、やりたいなあ」

そして「さようなら」のあいさつが終わると、待っていた母親と、あるいは友だちとつれだって帰っていく。その後姿には、二重の言語生活を見事に使い分け、生活を楽しんでいる明るさがある。教室を出て、友だちと笑顔で声高に話しているのは、ドイツ語であった。

この原稿をまとめるにあたり、みその国語教室で共に働き、資料を提供し、協力してくださった光吉喜美子先生にお礼を申し上げます。